

Bookshelf 書棚

2014-2015

アクト/インスタレーション

(画像 [普通紙に染料インクジェット]、随筆 [古書紙に染料インクジェット]、木材)

写真: 218x326 cm (121片), 随筆(紙):各約20x10 cm, 書棚:24x45x1.8 cm



(上) 随筆と画像のインスタレーション風景
(下) 通りがかる観客と画像部分のインスタレーション風景



書籍の層に人の歩いてきた道のりを重ね、一見隔たりがあるものの交わる点を見つめ、文化や価値観、年齢といった距離にまつわる小物語を紡いだ短い随想と一つの写真で構成される作品。

重み、層、人生の道のり

写真は、スイス・アルプスで歩き廻った際に摘んだ野の草花が挟まれた本を50歳年上の友人の書棚に置くという、つかの間の介在を捉えている。私のアイデンティティや人生、その老婦人との関係性と響き合う書籍を彼女の書棚から選び、かつてアルプスでしたように、草花の挟まれた本の上に積み重ね、棚と棚の隙間を埋めたものである。インスタレーションでは、積まれた本の層が老婦人と私の身長と同じ171cmになるよう画像を拡大、121の紙片に分けて印刷し、一枚一枚ピンで四隅で止めた。

ページでの出会い

随想では、異なる価値観や人生を並べ合わせ、50歳年上のスウェーデン老婦人との出会いとその関係を綴っている。つかの間のインスタレーションである彼女の書棚への介在は、この文の主題の物理的そして詩的な現れでもある。この随想を、積み上げられた本の中の二冊から取り出した二枚の紙片(一番上の本の最初の頁と一番下の本の最後の頁)の「裏」の無地の側に印刷した。

さらに「成長」する作品

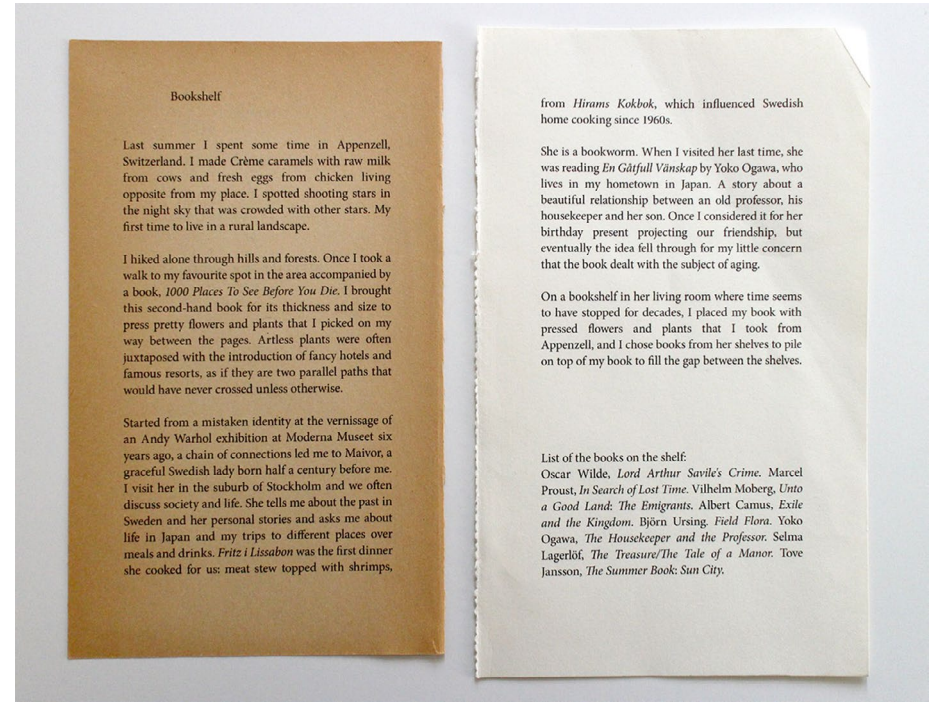
画像は、数々の展示を経て酸化、日焼けして「老いて」いくように、長期保存に適さないインクジェット紙にその色彩が長く保たれることのない安価な染料インクで印刷。積み上げられた書籍は、その主題や著者のアイデンティティによって、世界の可動性(移民や観光)、植民・移民の歴史、高齢化社会、LGBT、フェミニズムといった現代社会における多くの人々の関心事につながるものともなっている。

(下) 何枚もの紙片で構成される、画像部分の詳細





(左上) 作品の画像部分のオリジナル写真
 (右上) 積み上げられた老婦人の蔵書のうち、一番上の本の最初の頁と一番下の本の最後の頁の裏に印刷された、作品の随筆部分
 (右下) 随筆の英語原文の和訳



『Bookshelf (書籍)』和訳

スイスのアッペンツェルで昨夏を過ごした。家の向かいに住む牛から搾った生乳と産みだての卵でクレーム・カaramelを作り、ほかの星たちで溢れる夜空に流れ星をいくつも見つけた。初めての牧歌的風景の中での暮らし。

丘を超え、森を抜け、ひとり歩き廻る。ある日、『死ぬ前に見るべき1000の場所』という本を携えてお気に入りの場所へと向かった。野道で摘む花や植物を挟んでいくのにちょうどいいサイズと分厚さから、山の麓の古本屋で手に入れた一冊。そうでもしなければ決して出合うことのない二つの平行な道筋のように、素朴な植物は豪華なホテルや有名な行楽地の紹介と交わることとなった。

六年前のストックホルムの現代美術館でのアンディ・ウォーホル展のオープニングでのちよとした人違いからつながった縁で、わたしより半世紀先に生まれた上品なスウェーデン婦人、マイヴォルと知り合った。ストックホルム郊外に彼女を訪ね、わたしたちは社会や人生についてしばしば語り合う。ともに食事をとりお酒を酌み交わしながら、彼女はスウェーデンの過ぎ去った日々や彼女自身の話を語り、日本での生活やわたしの様々な土地への旅について問いかける。わたしたちの最初の夕食に彼女が用意してく

れたのはお肉のシチューの上に小エビが添えられた「リスボンのフリッツ」という、1960年代からスウェーデンの家庭料理に影響を与えた『ヒラムの料理本』からの一皿だった。

彼女は愛書家だ。先日彼女を訪ねた際には、わたしの故郷に住む小川洋子の『博士の愛した数式』を読んでいた。年老いた教授、その家政婦、そして彼女の息子の美しい関係性についての物語。一度は彼女への誕生日の贈り物にと考えたものの、その本が年老いていくことについて論じていることが気にかかり、最終的に立ち消えになってしまっていた。

何十年もの時を貯め、保ってきたような彼女の応接間にある書棚の上に、アッペンツェルで摘んだ草花を挟んだわたしの本を置いた。そしてその上に彼女の書棚から選んだ本を重ねてゆき、棚板と棚板の隙間を埋めていった。

書籍目録: オスカー・ワイルド『アーサー・サVILLE卿の犯罪』、マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』、ヴィルヘルム・モーベリ『入移民(良き地の方へ)』、『出移民』、アルベール・カミュ『追放と王国』、ピョリン・ウルシン『野の植物』、小川洋子『博士の愛した数式』、セルマ・ラーゲルレーヴ『アルネ氏の宝/モールバック』、トーヴェ・ヤンソン『少女ソフィアの夏』、『太陽の街』